

中世六郷山寺院の法会 1

段 上 達 雄

(1) はじめに 「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写」について

『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写（豊後国六郷満山谷々別院靈寺窟仏事神事等將軍家御祈禱卷数目録。以下『安貞の目録』と略す）』は、鎌倉時代中期の安貞2年（1228）に記された勤行や祭りの目録で、国東半島に広がる六郷山寺院群において、当時どのような勤行や祭りが行われていたかが分かる貴重な史料である。

『安貞の目録』を最初に研究の俎上に載せたのが、中野幡能氏の『六郷山の史的研究』（1971）であった。筆者は『豊後都甲荘の調査本編』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館・1993）に掲載した「六郷山寺院の年中行事と信仰」の中で、長安寺（屋山寺）と天念寺（長岩屋）の両寺院における、安貞の目録に記された法会について触れたことがある。しかし、わずか2寺院だけの勤行等の紹介では、隔靴搔痒の感は否めず、中途半端な分析しかできなかった。その頃、修正鬼会の研究のためには、一度『安貞の目録』の徹底した分析が必要であるとの認識を持つに至ったが、難解な仏教法会には手を出しかね、なかなか着手できないでいた。しかし、六郷山寺院の行事等の研究がようやく緒に就いたばかりであることに気づき、非才ではあるが、この考察をまとめることとした。仏教学に未熟な筆者であり、先学諸氏の御叱正を頂ければ幸いである。

それでは、『安貞の目録』は何のために記されたのだろうか。目録の最後に次のような記載がある。「偏是兼三道鎮大將軍御願円満、異国降伏、聖朝安穩、大施主殿下相模守平朝臣御息災延命、御寿命長遠、御心中御願円満成就之由、祈精之状、如件」

兼三道鎮大將軍あるいは殿下とは、初代藤原氏將軍の九条頼経のことである。相模守平朝臣とは北条時房のことで、甥の北条泰時とともに鎌倉幕府執権を務めていた。九条頼経と北条時房は自らの息災延命と寿命長遠、それに何らかの祈願成就を目的に、六郷山に勤行を依頼しており、この安貞の目録はその勤行の状況を通常の勤行とともに目録として、鎌倉幕府に提出されたもので、この「写」は目録の内容を内覧するように「六郷山衆徒御中」宛に出されたものである。

網野善彦氏が「豊後国六郷山に関する新資料」⁽¹⁾で紹介した新資料は、鎌倉幕府と六郷山の関係を記した文書である。この新資料は肥前国島原藩の藩主松平氏の蔵書の中の一冊として書写された史料で、島原市立図書館の「松平文庫」に伝えられてきた。

鎌倉幕府と六郷山寺院の関わりを示す最初の文書は、25号文書（元徳2年=1330）の中に引用された承元5年（1211）2月28日の「右大臣家（将軍源実朝）御下知（下文カ）」である。これは六郷山所司の訴えに応じて、四至内での狩猟を禁じ、下手張本の輩を注文にまかせて召すことを命じた文書で、同日に大宰小式（武蒔資頼）と豊後左衛門尉（大友能直）宛にこれを施行する関東御教書が下されたのである。

これに次ぐ古い年紀をもつのが13号文書で、安貞の目録を注進して約3カ月後の安貞2年（1228）8月16日付けの関東御教書である。源太子の代官包（兼）直法師と神官昌重が宇佐宮領として石屋石室に妨げをなすことを訴えた所司等の解状に対して、大友親秀に是非を尋ねて明らかにすることを命じたものである。同年11月25日付けの10号文書は下知状で、大友親秀が九月に兼直法師等に触れ、「是非の散状に及ばず」と注進し、それによって、六郷山執行領の両子山院主職以下谷々石屋々々等について兼直法師等の濫妨を停止し、執行円豪が領知すべきことを認めている。11号文書は12月27日付けの豊後国守護所（沙弥寂秀=大友親秀）の下文で、六郷山執行円豪宛に施行されて執行領の決着がついた。これより少し前の10月18日付けの18号文書は『安貞の目録』の注進に対する巻数返事と考えられている。『安貞の目録』の日付は安貞2年5月となっており、5カ月ほどかけて返事が返ってきたのである。それは次のような内容であった。

豊後国六郷山執行令勤行御祈之由被聞食畢者、依鎌倉殿仰執達如件

安貞二年十月十八日 武蔵守_{在判}（北条泰時）

相模守_{在判}（北条時房）

六郷山執行御返事

六郷山執行円豪は“祈祷”によって幕府に接近することに成功し、このような関係の中で濫妨停止と執行円豪の領知を認める下知状が出されたのである。六郷山を「将軍家御祈祷所」（10号文書）とすることによって、12月8日付けの武蔵守（北条泰時）の7号文書や泰時・時房両執権からの15号文書では「将軍家御祈祷所」として正式に認められ、「向後、諸方の妨なく、執行安堵せしむべし」と、執行の立場も保証されたのである。

さて、この目録が作成された安貞2年（1228）とは、どのような時代だったのだろうか。承久元年（1219）正月27日、鎌倉幕府の三代将軍源実朝は、鶴岡八幡宮での右大臣就任拝賀の式典の折り、二代将軍源頼家の遺児八幡宮別当公暁によって暗殺された。2月2日、鎌倉からの使者が京都に到着して実朝暗殺の報を伝えた。それを知った京都の人々の動揺は大きかった。実朝の死後、鎌倉殿（将軍）の職務は母政子（尼将軍）が代行することとなり、北条義時（政子の弟）が政子を補佐して実権を掌握した。ここに北条氏による執権政治が確立したのである。鎌倉幕府は将軍の後継者として後鳥羽上皇の皇子を迎えることを決めて要請したが、不首尾に終わった。そのかわり、九条道家（関白・1193～1252）の子息三寅（後の九条頼経・1218～56）の母方が源頼朝とつながっていることを理由に、上皇からこの2歳の童子を鎌倉殿として迎えることの承諾を得た。藤原氏将軍第一代（第四代将軍）となるこの幼子は6月には鎌倉に下向し、多くの武士たちに迎えられた。しかし、後鳥羽上皇の倒幕運動は密かに進み、承久3年（1221）5月14日、上皇は鳥羽離宮内の城

南寺の流鏑馬と称して諸国の兵を集め、ここに承久の乱の幕は切って落とされた。乱の経過を説明することは本論からはずれるので省略する。後鳥羽上皇を中心とした承久の乱は失敗し、鎌倉幕府は仲恭天皇を廃位して後堀河天皇を即位させ、後鳥羽上皇を隠岐へ、土御門上皇は土佐へ、順徳上皇は佐渡へとそれぞれ流罪に処し、上皇方の公卿・武士の所領を没収して新補地頭を置き、六波羅探題を設置して京都の監視を強化した。これによって鎌倉幕府の権力が確立した。

承久の乱から3年後、幕府の指導者であった執権北条義時が62歳で急死した。ごたごたはあったが、その後継者は義時の長子北条泰時（1183～1242）に落ち着いた。しかし、翌嘉禄元年（1225）、幕府の重鎮大江広元、尼子将軍北条政子が相次いでこの世を去った。この政治危機の中で、泰時は集団指導体制を導入し、合議政治に切り替えて難局を乗り切ろうとした。承久の乱以来、六波羅探題として泰時を支えてきた叔父の北条時房（北条義時の弟・1175～1240）を京都から呼び戻して連署に任じ、両執権と呼ばれる執権二人体制を創り出した。泰時は有力御家人の代表と幕府の事務官僚で構成される評定衆11名を選んで政所に出仕させ、それに執権・連署2人を加えた評定を新設して幕府の最高機関として、政策・人事・裁決・立法等を司るようになった。

北条時房が執権として幕府中枢に参画するようになって3年目に、六郷山で『安貞の目録』が作られたのである。六郷山と関わりを持つようになったのは北条時房である。11歳という幼少の将軍藤原頼経は一種の飾り物に過ぎなかったし、北条時房は多頭制の中で、執権の補佐役（連署）として政治的に安定していたとはいえなかったであろう。鎌倉幕府内の不安定な政治的事情と、八幡宇佐宮や武士たちの押領に悩まされていた六郷山寺院とは、このような状況の中で結びついていったのである。北条時房は連署になる前は、泰時と共に六波羅探題であったため、京都の事情には詳しくなかったであろう。本家職であった比叡山延暦寺を介して、六郷山は祈祷という手段で鎌倉幕府の要人に取り入っていったのであろう。

（2）『安貞の目録』の構成

「安貞の目録」は本山分14カ所、惣山（屋山寺）、中山分16カ所、末山分2カ所の「当山霊場」が列挙され、それぞれの勤行や神事が記されている。しかし、不動石屋などのように勤行の記載のないところもあるし、喜久山のように「種々勤等中絶」と記されたところもある。勤行と神事は整然と区別されて記載されている。まず、寺院・石屋等の名が記され、本尊が書かれている。次に年中行事化している勤行が開催日と共に記され、毎月一定の日に行われる勤行、毎日行われる勤行と続き、日程不明の勤行が記される。その後に鎮守社である六所権現や山王権現の神事が記される。これも年中行事、毎月の行事、毎日の行事、日程不明の行事の順で記されている。最後に「今始御祈祷」の項が続くが、これは「将軍家御祈祷」で行われた勤行のことである。なお、目録の最後には、六郷山での修行方法、それに「将軍家御祈祷」の目的が記されている。このような整然とした記載方法ではあるが、冒頭の後山石屋の項では混乱が見られる。「於六所権現御宝前」と記された

後に「於石屋仏前」、「於権現御宝前」と記し、それぞれ勤行を列挙しているのである。そのため、後山石屋には主要施設以外に、六所権現、権現など複数の施設があったと考えられている⁽²⁾。しかし、前後の勤行の内容から推測すると、これは「於六所権現御宝前」と「於石屋仏前」の間に「今始御祈祷」という語句が欠落したために生じた錯誤であろう。後山石屋の主要施設は石屋で、鎮守社は六所権現だけなのである。

記載された寺社 「安貞の目録」には、【本山分】の後山石屋（後山金剛寺）・伊多井社（伊多井妙見）・吉水寺（吉水靈龜寺）・津波戸石屋（津波戸山水月寺）・大折山（大折山報恩寺）・鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）・高山寺（西叡山高山寺）・間戸石屋（西蓮山間戸寺）・喜久山（馬城山伝乗寺）・不動石屋（熊野磨崖仏）・大日石屋（熊野磨崖仏）・辻小野寺（辻小野山西明寺）・大谷寺（小溪山大谷寺）・智恩寺（良薬山智恩寺）、【惣山】の屋山寺（金剛山長安寺）、【中山分】の長岩屋（長岩屋山天念寺）・龍門石屋（龍門岩屋）・虚空蔵石屋（※三島神社）・黒土石屋（黒土山本松坊）・四王石屋（※四王権現社）・小岩屋山（小岩屋山無動寺）・大岩屋（大岩屋山応曆寺）・夷石屋（夷山靈仙寺）・西方寺（西方山清浄光寺）・千燈岩屋（補陀落山千燈寺）・五石屋（五之岩屋）・岩殿岩屋（不明）・枕石屋（不明）・銚子岩屋（不明）・瀧本岩屋（瀧本岩屋）・大嶽寺社（大嶽山神宮寺）、【末山分】の両子仙（足曳山両子寺）・小城寺（小城山宝命寺）など33カ所の寺社岩屋（石屋）が記載されている。なお、括弧内は宝暦2年（1752）の『六郷山本紀廿八山本末之記』に記載された寺院名で、※印は現在の比定地。

この表記を見ていると、石屋11件・岩屋7件、山石屋1件、岩屋山1件、寺6件、山寺2件、山1件、仙1件、社1件、寺社1件となる。

石屋も岩屋も共に“いわや”と訓じるが、その違いは明確ではない。「石屋」と「岩屋」は庇状に突きだした岩陰に堂祠などが建てられたもので、長岩屋天念寺の講堂と身濯神社（六所権現社）がその代表で、ここはまさに長い岩陰（岩屋）の中に社寺の建物が納まっている。彦山などでも岩屋が霊地として崇められていることから、岩屋は地中へとつながり、神霊が出現する霊地として考えられていたのだろう。

「山」は背後に特徴的な信仰対象となるような山腹にある寺院を意味するようである。標高297.6mの応利山の中腹に大折山報恩寺（延宝年間に黄檗宗寺院として再興）はあったが、戦後山を下って上来繩に移転した。大折山には風除大権現が祀られており、かつては風除け信仰で崇敬されていた。

「仙」としては唯一「両子仙」という表記がある。国東半島の最高峰で、その中心である標高721mの両子山自体を尊崇して、「山」を「仙」と表記したと思われる。「山寺」には高山寺と屋山寺がある。高山寺は標高571.8mの西叡山の中腹にあったと伝え、屋山寺（長安寺）は標高543.4mの屋山中腹の寺院で、付近に岩屋はない。

「寺」には吉水寺・辻小野寺・大谷寺・智恩寺・小城寺がある。吉水寺跡は平地近くで、大谷寺跡は谷の突き当たりであり、今でも地名を小谷^{おたに}という。智恩寺は丘陵上に、小城寺は標高256mの小城山麓にある。比較的高い位置にあるのは辻小野寺で、標高約300mの辻小野山の山頂近くに位置する。とはいえ、そびえるほどの山ではない。この「寺」の場

合も付近に岩屋はない。「寺」は平野部や目立つ山の近くになく寺院を意味するようである。

「社」を名乗るのは、妙見を祀る伊多井社だけで、現在では所在不明である。神社ということ、当時、妙見菩薩は神として認識されていたと思われる。

「寺社」と名乗る大嶽寺社の項には「高山豊後国鎮守也」と記されているが、その実体は不明である。高山とは標高560.4mの大嶽山のことと考えられ、かつて山上には大嶽権現社が鎮座していた。この大嶽権現社と大嶽寺(?)とで寺社と呼ばれていたとすると、権現社の位置づけは大きなものであったに違いない。現在、大嶽山神宮寺が所蔵する懸仏8面は元は大嶽権現社の仏体で、正応5年(1292)銘の懸仏は大分県最古のものである。この大嶽権現社が豊後国鎮守だったのであろう。『安貞の目録』に記された「六所権現」のことであろうが、ここの祭りに妙見祭があることは注意しなければならない。妙見菩薩も合祀されていた可能性があるからで、妙見は北極星を神格化した菩薩で、国土守護と人の福寿を増すと信仰されており、豊後国の鎮守として祀られていたと思われる。

勤行記録のない岩屋 この33カ所の施設の中で、喜久山⁽³⁾・不動石屋・大日石屋⁽⁴⁾、それに五石屋・岩殿岩屋・枕石屋・銚子岩屋・瀧本岩屋には勤行祭等の記載がない。この段階で無住となったか、あるいは最初から僧侶の居住しない施設だったのであろう。

この中で興味深いのは、不動石屋と大日石屋である。いずれも記載から、熊野磨崖仏の不動明王と大日如来であると比定できる。『安貞の目録』には「一不動石屋、本尊不動、五丈石身、深山真明如来自作」「一大日石屋、本尊大日、五丈石身、深山同尊種子岩切頭給也」と記されている。それでは、不動石屋の「深山真明如来」、あるいは大日石屋の「深山同尊」とは何者なのだろうか。「深山真明如来自作」「深山、同尊(大日如来)と種子を岩を切りて頭にし給う也」と記されているように、磨崖仏の作者であると記している。当時、このような磨崖仏を刻むこと自体が修行であったと考えられ、深山、あるいは深山真明は、この磨崖仏を刻んだ石工僧の名と推測できる。当時としてはあまりにも大規模な造作であるとともに、尊崇されるほどの仏教者であったため、如来と特に呼ばれたのではないだろうか。他にこの作者名を伝える文書もないため、確かめる方法はない。また、「深山」という言葉は、『安貞の目録』の中で、千燈岩屋(修正月会)や五岩屋を山深い場所であるという意味でも使われているようなので、石工僧の名はただ単に“真明”であったとも考えられる。性急に結論づけるのは注意しなければならないが、ただの伝承として切り捨てるには惜しい気がする。国東半島では、ほとんどの六郷山寺院の開基と多くの仏像の製作者が仁聞菩薩と伝えられ、奈良時代の創建造立であるという。このような伝説の単純化と時代的遡上は、後世に一種のキャンペーン的喧伝が行われたことを想起させる。伝説では熊野磨崖仏の作者は仁聞菩薩というし、地元では熊野神社の奥に仁聞菩薩の所帯場(日常生活の場)があったと伝えている。仁聞菩薩の徹底した周知が、六郷山諸寺院を開発した多くの僧侶たちの名を忘却の彼方に押しやったのであろう。

(3) 『安貞の目録』に見る諸勤行

①法華経

法華経は初期大乘仏教を代表する経典のひとつで、西暦1～2世紀に成立したと考えられている。鳩摩羅什が西暦406年に漢訳した「妙法蓮華経」が最も知られている。天台大師智顛が妙法蓮華経を根本に中国天台宗を確立し、日本では伝教大師最澄が継承発展させて日本天台宗を開いたため、この経典への信仰は広く普及した。法華八講・法華十講・法華三十講などは死者供養、あるいは生者逆修を目的に催されてきた。

「法華八講」は法華経八巻を八座に分けて、一巻を一座ごとに講讃供養する法会であり、講讃とは経論等の内容や意味を講じて、その功德を称賛することである。開経の無量義経と結経の観普賢経との二経を加えて十講とすることもある。法華経二八品に開結二経を加えて三十座で講讃することを法華三十講という。「八座問答講」「法華問答講」「法華三十問答講」はいずれも問答形式で進行する法会である。問答講とは僧侶の学業を試みる論議の意味もある。

後山では「修法華三十問答講、天台大師供、在童立儀 十一月二十四日勤也」と続けて記されており、この三つが11月24日に合わせて行われていたと読むことができる。同様に、屋山寺でも「八座問答講、天台大師供 十一月廿四日勤也」、長岩屋でも「修問答三十講 請僧廿人、天台大師供 十一月廿四日」、千燈岩屋でも「大師供 十一月廿四日、同修八座問答講 請僧八人」としるされ、いずれも11月24日の開催であると読むことができる。それでは、この日は何の日なのだろうか。実は「天台大師供」の行われる日なのである。「天台大師供」は天台大師智顛(538～597)の忌日にその報恩謝徳のために法華十講を修する法会である。智顛は中国天台宗の開祖で、智者大師ともいい、隋の開皇17年(597)11月24日に天台山西門の石城で60歳の生涯を終えた。日本天台宗の開祖伝教大師最澄は、延暦17年(798)11月から毎年法華十講を修してきたが、延暦20年に南都の諸大徳を請して法華十講を修した。これが比叡山延暦寺の霜月会の始まりである。この延暦寺の行事が六郷山寺院にも伝わったのだろう。「天台大師供」は吉水寺・小岩屋山・夷石屋・両子仙・小城寺でも行われていた。ところで大嶽寺社では11月24日に「法華会」が催されていた。これはどのような法会だったのだろうか。法華会とは法華経を講説する法会のこと、延暦寺では毎年伝教大師最澄の忌日(6月4日)、また霜月会として天台大師智顛の忌日に行われ、五年目ごとに法華大会が盛大に営まれている。六郷山では、法華会の開催寺院は天台大師供のそれと全く重ならず、「天台大師供」と同じ11月24日の開催であることから、同一の法会であったと考えられる。法華経に関わる勤行は他のものと同時に開催されることが多い。津波戸石屋では「法華不断経 自十月八日至同十日三ヶ夜也勤、同修法華八講 請僧八人」、小岩屋山では「修八座問答講、三ヶ日夜法華不断経 自十月廿三日同至廿五日勤也」、夷石屋では「小立義、八座問答講 請僧八人、三ヶ日夜法華不断経 十月十八日ヨリ同至廿日勤也」、大嶽寺社では「三ヶ日夜法華不断経 十月十七日ヨリ同至十九日勤也、同修八座問答講 請僧八人」、両子仙では「三ヶ日夜法華不断経 自十月廿二日同至廿四日、同修三十講問答講 請僧卅八人、童豎義 五問在之」、小城寺でも「不

断経 自十月十八日同至廿日、同修八座問答講 請僧八人」とある。いずれも10月の行事である。これらの勤行の中に「小立義」「童豎義」という行事が含まれている。豎義とは諸種の法会などで僧侶の学業を試験するために論議させることである。「立義」とも書く。受験者を豎義者（豎義・豎者ともいう）、試験者を問者（難者ともいう）、判定者を精義（証者ともいう）といい、最終判定者は探題といって一宗の学徳兼備の長者が担当する。問者は課題に従って難詰し、豎義者は自己の義を立てて問者と論弁し、精義は豎義者の立てた論議の否を判断し、最後に探題が論議の得略を決定した。「童豎義」とは少年たちの学業試験である。後山では11月24日の天台大師供等と同時に行われていたし、両子仙では時期は不明ながら「童豎義五問在之」と記されている。かつて、大寺院では、出家の如何を問わず、稚児が在俗の姿で住み込んで学問を受ける慣習があった。このことから後山と両子仙では少年たちを教育する制度があったことが分かる。また、夷石屋の「小立義」も「童豎義」と同じではないかと推測できる。

問答講の場合、請僧八人などと記されており、その問答は僧侶によって行われていたことが分かる。この場合の請僧とは受験者のことを指すものと思われる。問答講の請僧数が記されている場合には、その寺院の勢力が推測できる。津波戸石屋・夷石屋・大嶽寺社・小城寺ではそれぞれ八人であるのに、両子仙だけは卅八人と飛び抜けて多い。

転読大般若経でも同様なことが考えられるが、後山石屋・屋山寺六所権現・長岩屋・小岩屋山・夷石屋・千燈岩屋・両子仙のいずれも請僧廿人となっている。僧数よりも、このような多数の僧侶を集める法会を開催できること自体が、寺の勢力を物語っていると考えられることができる。

以上のことから、六郷山寺院では、少年たちの学業試験は豎義（立義）、僧侶たちの学業試験は問答講だったとするのが最も素直な考え方であろう。

②仁王経

仁王経は正式には仁王般若波羅蜜経といい、仁王般若経ともいう。後秦の鳩摩羅什の訳と伝えるが、中国で成立した偽経と考えられている。唐の不空訳と伝える仁王護国般若波羅蜜経もある。仏陀が波斯匿王のために説いた教えで、般若波羅蜜の法を誦持することによって国家を守護して繁栄させることができると説く。古くから護国のための経として尊重され、鎮護国家を祈願するために仁王経を講讃する仁王会が中国・高麗・日本で盛んに行われた。本来、インド原始仏教では先祖祭祀や護国思想は希薄で、仏教の布教の中で、中国の社会体制に順応するために、このような護国祈願の経典が創作されたのであろう。

「百座仁王経」とは仁王会のことである。仁王般若会・仁王道場・百座道場・百座会ともいう。仁王経の説に基づき、百の高座を設けて百名の僧侶を請じて同経を講讃して、国家安穩・万民豊樂を祈り、天変地異や諸難を防ぐための法会である。日本では斉明天皇六年（660）に初めて催され、その後宮中・諸大寺・国分寺などで営まれるようになった。仁王会には、毎年行う春秋二季仁王会と臨時仁王会、天皇即位の時に行う一代一（講大）仁王会がある。屋山寺・小岩屋山・両子仙という六郷山の中核寺院が催していた。特に小岩屋山では毎月1日に行っていたことは注目される。

③最勝王経

最勝王経は正式には金光明最勝王経といい、唐の義浄の訳である。仏の法身は不滅であること、三身の別、菩薩十地の修行、金光明懺悔法の功德などを説く。国王が正法を行えば、四天王が守護するといひ、その鎮護国家的性格により、法華経・仁王般若経とともに鎮護国家三部経のひとつとして重視された。この経典をもとに、日本では四天王寺・国分寺が建立され、最勝会が催されるようになった。経典中の流水長者の説話から八幡宇佐宮の放生会が創設されたといわれ、捨身飼虎の説話は法隆寺の玉虫厨子に描かれて良く知られている。「最勝講」とは、本来は毎年五月の吉日の五日間、東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺の四大寺の僧を招請し、宮中清涼殿で金光明最勝王経を講説させて国家の安泰を祈らせた法会である。六郷山寺院の場合、最勝王経を講じて鎮護国家を祈願する法会であったと思われる。夷石屋では「最勝王講一座行之」、両子仙では「最勝講」と記されているが、いつ行われたかは書かれていない。

④般若経

大般若経は正式には大般若波羅蜜多経といい、唐の玄奘が訳した経典である。般若部に属す諸経典のほとんどを網羅した六百卷という大部の経典で、十六種の経典を十六会として収録する。日本では、鎮護国家・除災招福のために大般若経の転読又は真読する慣例がある。この経を供養する者は、般若守護の十六善神によって常に護持されるという経説によって厄難消除の利益があるとされ、「転読大般若会」が盛行した。「転読大般若会」とは大般若経を転読する法会のことである。転読とは題目と品名を読み上げ、その間に経典（折り本）を繰り広げて読誦に擬すという、見た目が派手なパフォーマンス性の高い行法である。「一日転読大般若会」を、後山では正月20日、長岩屋と小岩屋山では10月15日、夷石屋では9月9日に催していた（千燈岩屋と両子仙は月日不明）。

「金剛般若経」は後秦の鳩摩羅什の訳で、正式には金剛般若波羅蜜経といい、金剛経ともいう。般若経典のひとつで、般若心経に次いで広く流布している。仏陀と須菩提の対話形式で般若思想の要点を簡潔に説いた教典である。

「一万巻心経会」とは般若心経を一万回読誦する法会のことである。夷岩屋・千燈岩屋・大嶽寺社では毎月一日に行われ、両子仙では正月13日に行われていた。般若心経は般若波羅蜜多経といい、玄奘が漢訳したものが広く普及している。般若の思想を凝縮して簡潔に述べたもので、現在でも最も良く知られている経典である。宇佐神宮の末社八坂神社では2月14日に鎮疫祭が行われるが、この祭りは近世までは御心経会ごしんぎょえといわれていた。本来、八坂神社は宇佐宮弥勒寺の鎮守社であった。現在は長さ3mの巨大な五色幣を八坂神社境内に鳥居越しに投げ込み、その後、神社前の仮設舞台上で蘭陵王の舞いが演じられる。

⑤薬師信仰

薬師如来は薬師瑠璃光如来・大医王仏ともいう。菩薩であった時に十二の大願を發して成仏した仏で、日光菩薩と月光菩薩を脇士として、十二神将を眷属として東方浄瑠璃世界に住する。薬師如来を礼拝供養すると、病気は平癒して長命を得ることができるという。

「薬師経」は唐の玄奘が訳した薬師瑠璃光如来本願功德経のことである。薬師瑠璃光如来

の浄土である浄瑠璃世界の莊嚴、その仏名を唱えることによって得られる利益、薬師如来を供養することによって死者を死後の苦からのがれさせる功德があると説く。「月並勤薬師講」は薬師如来を祀る講で、薬師如来の縁日である毎月八日に行われていた。後山石屋（本尊薬師如来）・長岩屋（本尊観世音菩薩）・小岩屋山（本尊薬師如来）・千燈岩屋（本尊千手観音）・大嶽寺社（本尊薬師如来）・両子仙（本尊薬師如来）で催されていた。吉水寺の「月並勤薬師経」も同じ法会であったと考えられる。長岩屋と千燈岩屋は本尊が観音、吉水寺は本尊無量寿如来（阿弥陀如来）であるが、現在の長岩屋天念寺では本堂に観音菩薩、講堂に薬師如来を祀っており、鎌倉期においても同一寺院内でさまざまな仏菩薩が祀られていた。「薬師供」とは薬師如来を供養する、すなわち花・香・食物等の供物を供えることを中心とした法会で、両子仙で月並勤薬師講とは別に催されていたが、月日の記載はない。また、長岩屋の「薬師経十二卷」も「月並勤薬師講」とは別に催されていたが、月日は不明である。

⑥観音信仰

「観音経」は後秦の鳩摩羅什の訳した妙法蓮華経卷八の観世音菩薩普門品第二五の通称で、観世音経・普門品・普門経ともいう。仏陀が無尽意菩薩の問いに答える形で進行する。観世音の名を聞き一心に称名すると、解脱が得られ、観世音の名号を唱えると、火難水難などの七難をのがれ、観世音を念じると三毒を離れることができ、観世音を礼拝すると福德智慧の男子、衆徳愛嬌の女子を産むことができるという。観音が三三種に身を応現して十九尊教の随類説法をなすというので、観音と三十三という数字は密接な関係をもつ。天武天皇の病氣不予の時に観世音経が書写され、それ以降は特に身の安全を守るための持経として広く民間でも読誦され、数々の靈験譚が伝えられている。そのため、観音経の読誦は三十三巻が基本で、長岩屋・夷岩屋・大嶽寺社で読誦されていた。「月並勤観音講」は毎月18日に行われていた観音菩薩を祀る法会である。18日は観音菩薩の縁日である。観音菩薩を本尊として祀る講で、さまざまな現世利益的な祈願を行っていたと思われる。

“講”とは、信者が集まって本尊である仏菩薩などの徳を賛美する法会、または経典の講義や論議をする会のことである。14カ寺で実行されており、六郷山寺院で観音信仰が盛んであったことが分かる。「観音不断経（観音経不断）」は、請僧20人が観音経を一定期間絶え間なく読誦する法会のことである。後山石屋では正月9日、辻小野寺では正月8日の1日ずつであるが、千燈岩屋と両子仙では日次で（毎日）行われていた。長岩屋・夷岩屋・大嶽寺社・両子仙で「観音経卅三卷」を読誦していたが、いずれも月日は明らかではない。両子仙と小城寺の「一日転読一千卷観音経」は観音経千巻を転読する行法で、両子仙は月日不明だが、小城寺では正月18日に行っていたことが分かる。両子仙の「千手陀羅尼」は千手千眼大悲心陀羅尼（千手千眼観自在菩薩廣大円満無碍大悲心陀羅尼の略）のことである。千手観音菩薩の功德を述べた八十二句からなる呪文で、千手経（千手陀羅尼経）に記載されている。この陀羅尼を唱えれば、千手観音の功力によって、すべての悪業・重罪が消滅するという。同じ両子仙の「千手供」とは千手観音菩薩を供養することを中心とした法会である。両子仙は観音信仰で注目される。「月並勤観音講 毎月十八日」「日次勤観音不断

經 供僧十口」「一日転読一千卷観音経」「千手陀羅尼 各廿返」「千手供」が行われ、“今始御祈禱”の「観音経卅三卷」を含めると、観音菩薩の法会は6件となる。薬師如来と共に千手観音が本尊であるが、当時、両子仙の観音信仰が極めて盛んであったことが分かる。

⑦阿弥陀信仰

「大念仏」とは大声で阿弥陀如来の名号を唱える法会である。「大念仏二季彼岸」とあるように、吉水寺・辻小野寺・大谷寺・夷石屋・西方寺（「二季彼岸大念仏」）・両子仙で春秋の彼岸に大念仏を催していた。彼岸は日本独自の行事である。“彼岸”は仏教に由来する言葉だが、仏説にはない。しかし春秋の彼岸の頃は日想観に適した時期であるともいわれ、平安中期には彼岸の仏事が定着するようになっていた。農耕と結びついた太陽信仰が基盤にあり、それが祖先供養と習合したのである。

秋から冬にかけて大念仏を開催する寺院もあった。後山石屋では「三ヶ夜大念仏 自九月十三日至同十五日勤也」、屋山寺では「大念仏 自九月十三日至同十五日三ヶ夜勤也」とあり、長岩屋では「三ヶ夜大念仏 自十一月一日至同三日勤也」と記されている。

「月並往生講」は阿弥陀如来の浄土願生者が毎月15日に集まって行う講である。浄土教の先駆者である永観（1032～1111）はこの往生講の法式を定めた「往生講式（阿弥陀講式）」を著している。発菩提心・懺悔罪障・随喜善根・讚歎極樂・因円果満・廻向功德の七門から構成され、それぞれ願文と歌頌が記されている。「月並往生講」は、後山石屋・吉水寺・屋山寺・小岩屋山・両子仙・小城寺で行われていた。

⑧不動信仰

不動明王は、大日如来が悪魔・煩惱を降伏させるために化現したもので、憤怒の相をとる。さまざまな煩惱と障害を焼き払い、悪魔を降伏して行者を擁護し、菩提を成就させて長寿を得させるといふ。五大明王・八大明王の主尊であり、明王の中では最も広く信仰されている。不動明王を本尊とする寺院は、屋山寺と不動石屋（現在の熊野磨崖仏・不動明王）・五岩屋で、前者は本尊3体のうちのひとつで、後者のふたつは安貞時には勤行等がなされていない状況であった。「不動行法」とは不動明王を主尊として行う密教修法である。「不動講」は不動明王を本尊として祀る講で、毎月28日に行われていた。28日は不動明王の会日である。六郷山寺院では不動行法は長岩屋、不動講は千燈寺でのみ催されていた。

⑨虚空蔵信仰

「虚空蔵講」は虚空蔵菩薩を祀る講である。虚空蔵菩薩は胎蔵界曼荼羅の虚空蔵院の主尊で、虚空のように廣大無辺な福德と智慧によって人々を救い、頭脳を明晰にして記憶力を増大させる求聞持法（虚空蔵求聞持法）の本尊として尊崇された菩薩である。虚空蔵講は虚空蔵岩屋で虚空蔵菩薩の縁日の毎月13日に行われていた。この岩屋は「本尊如名」とあるように虚空蔵菩薩を本尊としていた。実は虚空蔵岩屋の「修正月会」も正月十三日に催されており、虚空蔵菩薩の縁日に因んでいることは間違いない。この岩屋は加礼川の奥に位置し、当時は屋山長安寺の支配下にあった。中世に河野氏によって押領されたと伝え、現在は三島神社となっているが、室町前期頃の造立と推測されている木造虚空蔵菩薩

立像が、今もなお祀られている。

⑩毘沙門信仰

毘沙門天は多聞天ともいわれ、四天王の一員である。胎蔵界曼荼羅の外金剛部院北門に位置し、仏法守護神として北方を守る。右手に宝棒、左手に宝塔をもつ姿で表されることが多い。七福神のひとりでもあり、富貴財宝を司り、単独では勝利の神として尊崇される。「毘沙門講」は毘沙門天を祀る法会で、四王岩屋で毎月三日に行われていた。毘沙門講の行われていた四王岩屋は四天王を本尊としており、豊後高田市（旧真玉町）大字黒土の四王権現社と推定されている。近くにある福真磨崖仏（地元では四王権現磨崖仏と呼ぶ）は南北朝期の作とされており、金剛界大日如来を中心に、金剛界四仏・六観音・六地藏、胎蔵界曼荼羅を彫り出している。

⑪尊勝陀羅尼

「尊勝陀羅尼」は仏頂尊勝陀羅尼・延寿陀羅尼・善吉祥陀羅尼ともいう。尊勝仏頂尊の功德等を説いた八十七句の陀羅尼で、「尊勝陀羅尼經」にその因縁が記されている。尊勝仏頂尊とは、仏の最高の功德を象徴する神で、仏の頭頂に在るために“仏頂”といい、五仏頂あるいは八仏頂の中で最勝なので、“尊勝”という。一切の害障を除くことから除障仏頂ともいう。陀羅尼とは梵語の長文の呪文で、漢文に翻訳されずにインドの音のまままで読み上げる。尊勝陀羅尼は罪障消滅・寿命増長など多くの功德が説かれ、これを書写して読誦する、あるいは卒塔婆・高幢・樓閣の上に安置すれば、功德があると信じられた。現在も亡者得脱のために廻向の時に唱えられる。

⑫夏安居・布薩

「一夏九旬安居」の“一夏九旬”^{いちげくじゅん}とは4月16日から7月15日までの90日間を意味し、「一夏九旬安居」とは夏安居^{げあんご}の行事のことである。夏安居は夏行・夏経・夏断・夏籠・夏坐・座夏・白夏ともいう。本来はインドの降雨期3カ月間における仏教僧団の特別な年中行事のことで、その間は遊行に不便でもあり、虫類を踏み殺すことを恐れて、一定の場所に住んで研究修養に努めたことから始まる。『日本書紀』天武天皇12年秋7月の項に「是の夏に始めて僧尼を請^ませて、宮中に安居せしむ。困りて浄行者三十人を簡^{おこなひひと}びて出家せしむ」とあり、これが日本での夏安居の初出である。そして延暦25年（806）には桓武天皇が十五大寺と諸国分寺に勅して安居を行わせている。「一夏九旬不断供花」は4月16日から7月15日までの九十日間、本尊に絶えることなく花を供えること。“一夏九旬”という言葉自体が夏安居を意味しているので、夏安居の期間中に花を絶え間なく供えることをいう。基本的には夏安居の行事であるため、六郷山の諸寺院で「一夏九旬不断供花」と「一夏九旬安居」とが重複することはない。

本来、「布薩」とは同一地区内の僧侶たちが半月ごとに会合して、過去半月の行為を自己反省して、罪があれば告白懺悔する行事で、毎月の満月と新月の時に行われた。この時に戒律の条項の全て、あるいは一部を読誦する。在家信者が六斎日^{おんじゅう}に八斎戒（不殺生・不偷盜・不姪・不妄語・不飲酒・化粧や歌舞に接せず・高くゆったりした床に寝ず・昼過ぎに食事せず）を受けることも布薩といった。なお、六斎日とは8日・14日・15日・23日・

29日・30日のことで、この日は四天王が人の善悪を調べ、悪魔がねらっている日なので、特に行動を慎む日とされていた。

六郷山寺院では、長岩屋・小岩屋山・千燈岩屋で「一夏九旬不断供花」の最終日である7月15日に布薩行っており、いずれも“一夏九旬不断供花、七月十五日布薩”と記されている。両子仙だけは「十月十五日布薩」と書かれているが、これは七月十五日の誤記であろう。六郷山寺院では、布薩は夏安居の最終日の行事であったが、すべての六郷山寺院で夏安居で行われていたわけではない。しかし、この7月15日という日は、現在の盂蘭盆会（お盆）の最後の日に当たり、精霊をあの世に送る重要な日である。『安貞の目録』が書かれた鎌倉時代、六郷山寺院では盂蘭盆会は行われていなかったことは注目すべきである。これによって、当時の六郷山の天台宗寺院における盆の死者供養あるいは祖先祭祀は、現在のように整備されていなかったと考えられる。

⑬舎利会

屋山寺の舎利会は“修舎利会、有舞楽二月十五日勤也”と記されているように、舎利会に伴って舞楽が演じられていた。この「舞楽」が実際どのような芸能であったか不明である。舞いを伴う雅楽とも考えられる。国東半島に隣接する宇佐には八幡宇佐宮（宇佐神宮）が鎮座するが、ここでは近世まで雅楽を奏する神職の家筋があり、舞楽も伝承されていたからである。しかし、屋山寺、現在の長安寺には舞楽、あるいは雅楽に関わる資料は残っていない。神楽のような舞いだったのかも知れない。舎利会が催された2月15日は、実は涅槃会の日である。釈迦が入滅した日で、その死を偲んで催される法会で、常楽会・涅槃忌ともいう。「舎利会」とは釈迦の遺骨である仏舎利を祀る法会で、まさに涅槃会のことである。大嶽寺社と両子仙の舎利会も同様に2月15日であった。

⑭曼荼羅供

「曼荼羅供」は“季別勤也”とあるように、曼荼羅を年4回、季節ごとに供養する法会であったが、この曼荼羅とは何だろうか。別尊曼荼羅では、それぞれの仏・菩薩供になってしまうので、金剛界曼荼羅と胎蔵界曼荼羅を併せた両界曼荼羅を祀っていたと思われる。六郷山諸寺院の中では、後山・屋山寺・両子仙だけが行っている。それぞれが拠点的中核寺院であり、「曼荼羅供」は特別な意味を持っていたと考えられる。

⑮長日護摩一座

「長日護摩一座」の護摩とは火祭りの意味で、本来はインドの火神アギニ（阿耆尼）を供養して招福辟邪のために行われた行法を仏教が取り入れたものだという。不動明王や愛染明王等を本尊として火を焚き、火中に物を投げ込んで供養し、息災・増益・降伏を祈願する。この行法を行う建物を護摩堂といい、堂内に護摩壇を設けて、壇上で木を焚く。その木を護摩木といい、それを伐る刀を護摩刀という。「長日護摩一座」は後山だけで行われていた密教修法であるが、長日、いわゆる長期間とあるだけで、開催期間等は不明である。

⑯御霊会

「御霊会」とは怨霊の鎮魂を行い、御霊として祀ることによって、災厄を防ごうとする

法会である。「御霊会」が大嶽寺社にだけ見られるのは不思議である。現在の大嶽山神宮寺には御霊を祀る施設も行事もない。『安貞の目録』によれば、大嶽寺社は“本尊薬師如来 高山豊後国鎮守也”とあり、高山、すなわち大嶽山頂に鎮座していた大嶽権現社は豊後国の鎮守であったと考えられる。もしかすると、大嶽権現社でなんらかの怨霊鎮魂のための御霊会を行っていたと推測されるが、定かではない。

⑰ 仏名・仏名経

「仏名経」は北魏の菩提流支の訳した經典である。過去・現在・未来の諸仏の名を称え、大功德があると説き、無数の三世諸仏の名とその功德を述べる。「仏名」は仏名会のことと思われる。千燈岩屋では「仏名 十二月二十四日」とあるように、仏名会は一年を締めくくる法会である。仏名会では過去・現在・未来の諸仏の名を称え、年内に犯した罪過を懺悔して諸仏の加護を願った。

⑱ 日次勤初後夜入堂読誦經典

「日次勤初後夜入堂読誦經典」「日次勤長日初後夜入堂読誦經典」「日次勤初後（夜が欠か？）入堂読誦經典」などと記されている。日次とは日ごと、あるいは毎日という意味がある。吉水寺と屋山寺だけは“月次”と書かれている。月に一度しか入堂するのは不自然であるし、月に一度の場合は“月並”と記されるのが普通なので、これは他の寺院と同様の“日次”の誤記であろうと考えられる。

寺院では一昼夜を六分して、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時に分けていた。初夜とは現在の午後6時から10時頃のこと、その時刻に行われる法会も意味する。後夜も同様に午前2時頃から6時頃のことであり、日没後と日の出前とに堂内で読経が行われていたのである。現在、一般的な天台宗の法要では“朝題目に夕念仏”と言われるように、朝から昼にかけては法華懺法（法華三昧）、夕方から夜にかけては阿弥陀経を中心とした“例時作法”が執り行われるが、この「入堂読誦經典」は例時作法の阿弥陀経のことと思われる。また、それぞれの堂の本尊に関わる經典なのかも知れない。

注

- 1 網野善彦「豊後国六郷山に関する新資料」『研究紀要Ⅳ』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館・1989）。
- 2 『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館・1993）の34頁には「上述した文献資料でみたように、安貞2年（1228）の目録に後山石屋、六所権現、権現」と記されており、六所権現と権現は別の施設であると認識している。
- 3 本山分の「喜久山」は「本尊丈六皆色阿弥陀如来、丈六不動、同大威徳」と記されているように、仏像の種類と規模から、現在の馬城山伝乗寺、いわゆる真木大堂のことと思われる。木造阿弥陀如来坐像（国重文）と木造大威徳明王像（国重文）は平安時代後期（12世紀）、木造不動明王二童子立像（国重文）は鎌倉時代初期（12世紀後半）と考えられている。喜久山という名称は、真木大堂の裏山馬城山の奥に聞山という山

があり、それに由来すると思われる。考古学的発掘調査が本格的に行われていないので、喜久山の本来の位置や規模等は不明である。仏像自体は京都で製作された優品であり、喜久山の建立には、所在地である田染荘の領主であった八幡宇佐宮が関与していた可能性が大きい。しかし、早くから、といっても何時からは分からないが、大堂と呼ばれているように僧侶の居住する寺院ではなく、無住の大型の堂として地元真木の人たちに守られるようになっていた。

- 4 『六郷山寺院遺構確認調査報告書VI』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館・1998）では、不動石屋は鍋山磨崖仏であると比定しているが、いかがなものであろうか。これは『太宰管内志』の「六郷山の縁起といふ物に稲積ノ不動とあり不動ノ石屋も慈恩寺も肩書きに田洪とあり」という記述に引きずられたためと思われる。『安貞の目録』には「一不動石屋、本尊不動、五丈石身、深山真明如来自作」とあり、五丈すなわち五十尺（15.15m）の高さがあるというが、鍋山磨崖仏の不動明王立像はわずか2.3mに過ぎない。田染地区内にはよりふさわしい磨崖仏がある。熊野磨崖仏（国重文）の不動明王像（像高8.07m）である。地表面からの高さはもっと増えるし、「不動石屋」と併記された「大日石屋」の意味が、熊野磨崖仏の方が理解しやすい。熊野磨崖仏には大日如来像（像高6.82m）があり、いずれも五丈には満たないが、それでも見上げるほどの巨大な磨崖仏である。大日如来像は平安中期の作と考えられており、大分県下では最古の磨崖仏であるし、不動明王像は鎌倉初期というが、もっと古いという説もある。

六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写（安貞目録）

安貞2年（1228）5月

	名 称	本 尊 等	勤行・堂役祭	今始御祈禱	
本山分	後山石屋 （後山金剛寺）	本尊薬師如来	年中勤修正月会（自正月六日至八日 三ヶ夜勤也） 観音経不断（一日一夜同九日勤） 一日転読大般若経（同廿日勤諸僧廿 人） 一夏九旬不断供花 三ヶ夜大念仏（自九月十三日至十五 日勤也） 修法華三十講問答 →天台大師供 →在童立儀（十一月廿四日勤也） 仏名経（十二月廿三日夜勤也） 曼荼羅供（季別勤也） 月並勤薬師講（毎月八日勤也） 往生講（毎月十五日勤也） 日次勤長日初後夜入堂読誦經典 長日護摩一座勤	於石屋仏 前？	長日薬師講十二 卷読之
		於六所権現御宝 前	二季御祭（二月十一月初午勤） 五節供等	於権現御 宝前？	仁王講一座 最勝王講一座行 之
	伊多井社 （不明）	本尊妙見菩薩	年中勤修正月会（正月一日勤） 七節供（毎節） 法華問答講 →同金剛般若経十二卷読之		長日金剛般若経三卷 仁王講一座 金剛寿命経十二卷読之
	吉水寺 （吉水山靈龜 寺）	本尊無量寿如来 （阿弥陀如来）	年中勤修正月会（正月五日勤也） 二季彼岸大念仏 一夏九旬安居勤 天台大師供（十二月二十四日勤也） 仏名経（十二月十八日勤也） 月並勤薬師経（毎月八日勤也） 往生講（毎月十五日） 月次勤初後夜入堂読誦經典		長日薬師経十二卷 観音経三十三卷読之
	津波戸石屋 （津波戸水月 寺）	本尊千手観世音 菩薩	年中勤修正月会（正月三日郷也） 法華不断経（自十月八日至十日三ヶ 夜勤也） →同修法華八講（請僧八人） 月並勤観音講（毎月十八日勤也） 日次勤初後夜入堂読誦經典	於岩屋観 音仏前	長日観音経三十 三卷 千手陀羅尼卅一 遍
	大折山 （大折山報恩 寺）	本尊聖観音	年中勤修正月会（正月五日） 一夏九旬安居勤 法華不断経（自十月廿一日至廿三日 三夜勤也） →（同？）修八座問答講 月並勤観音講（毎月18日勤也） 日次勤初後夜入堂読誦經典		長日観音経三十三卷読之
	鞍懸石屋 （鞍懸山神宮 寺）	於権現御宝前	二季御祭五節供等		

	名 称	本 尊 等	勤行・堂役祭	今始御祈祷	
本 山 分	高山寺 (西叡山高山寺)	本尊薬師如来 観音菩薩	年中勤修正月会 (正月八日勤之) 日次勤初後夜入堂読誦經典	長日薬師經十二卷 仁王講一座	
		於六所権現御宝前	二季祭五節供等		
	間戸石屋 (西蓮山間戸寺)	本尊薬師如来	年中勤修正月会 (正月八日勤之) 一夏九旬安居勤 法華不断經 (自十月十三日至十四日 三夜勤) 月並勤薬師經 (毎月八日勤也) 日次勤初後 (夜) 入堂読 (誦) 經典 二季御祭五節供 (等)	長日薬師經十二卷 仁王講一座読誦之	
	喜久山 (馬城山伝乗寺)	丈六皆色阿弥陀 如来 丈六不動、同大 威徳	種々勤等中絶		
	不動石屋 (熊野磨崖 仏)	本尊不動五丈石 身 深山真明如来 自作			
	大日石屋 (熊野磨崖 仏)	本尊大日五丈石 身 深山同尊種子 岩切顕給也			
	辻小野寺 (辻小野山西 明寺)	本尊千手観音	年中勤修正月会 (自正月一日至同三 日三ヶ夜勤也) 観音經不断一日 (同八日勤) 大念仏二季彼岸 不断供花(六月十八日一日一夜勤也) 仏名經 (十二月廿九日勤也) 月並勤観音講 (毎月十八日) 日次勤長日初後夜入堂読誦經典	長日観音經三卷 ・金剛寿命經読之 仁王講一座行之	
			於六所権現御宝前		二季祭 (二月十一日中午日勤) 五節 供等
			於三王御宝前		二季神楽 (六月十一月中申日祭)
	大谷寺 (小谷観音 堂)	本尊十一面観音	年中勤修正月会 (正月四日勤之) 大念仏二季彼岸 不断經 →供花(六月十六日一日一夜勤也) 法華不断經 (十月二十三日勤也) 月並勤観音經講 (毎月十八日) 日次勤長日初後入堂読誦經典	長日観音經 ・金剛寿命經各三卷読之 仁王經一座行之	
山王御宝前			二季神楽 (六月十一月中申日勤也)		
智恩寺 (良薬山智恩 寺)	本尊薬師如来	年中勤修正月会 (正月五日勤之) 一夏九旬安居勤 月並勤薬師講 (毎月八日勤也) 日次勤初後入堂読誦經典			
		六所権現於御宝前		二季祭五節供等	

	名 称	本 尊 等	勤行・堂役祭	今始御祈祷
惣山	屋山寺 (金剛山長安寺)	本尊千手観音 阿弥陀三尊 不動尊	年中勤修正月会 (自正月一日至同三日三夜勤也) 修二月会 (自二月一日同至、三日) 修舍利会 →有舞楽 (二月十五日勤也) 百座仁王経会 (正月八日勤也) 大念仏 (自九月十三日同至十五日三ヶ夜勤也) 法華不断経 (十月十八日同至廿日三ヶ夜勤也) 曼荼羅供季別 八座問答講 →天台大師供 (十一月二十四日勤也) 仏名経 (十二月廿三夜勤也) 月並往生講勤之 (毎月十五日) 観音講 (毎月十八日) 月次勤初後入堂読誦經典	長日転読大般若一帙 仁王講一座 観音経三卷 (件勤等満山現徳器量撰之)
		六所権現於御宝前	毎季一日転読大般若会 (請僧季別廿人) 毎季百座仁王会 一夏九旬不断供花 二季御祭五節供等 法華問答講一座五問 (毎月廿八日勤之) 転読大般若経一部 (請僧廿人) →并法華八講 (請僧八人) →小立義十問、豎者注記合十二人 (毎年以十二月二十三日一日一夜勤之)	
中山分	長岩屋 (長岩屋天念寺)	本尊観世音菩薩	年中勤修正月会 (自正月四日至六日三ヶ夜勤也) 修二月会 (自二月一日同至三日三ヶ夜勤也) 三ヶ日夜大念仏 (自十一月一日至三日勤) 一夏九旬間不断供花 七月十五日布薩 一日転読大般若会 (請僧廿人、十月十五日勤) 法華不断経 (十月二十八日同至卅日三ヶ夜勤也) →修問答三十講 (請僧廿人) →天台大師供 (十一月二十四日勤也) 仏名経 (十二月廿七夜勤) 月並勤薬師講 (毎月八日) 観音講 (毎月十八日) 日次勤初後入堂読誦經典 不動行法一座 薬師経十二卷 観音経卅三卷 (読之)	長日転読大般若一部 仁王講一座

名 称	本 尊・等	勤行・堂役祭	今始御祈祷
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	
龍門石屋 (龍門岩屋)	本尊千手觀音	仙室年中修正月会 (正月五日) 一夏九旬間不斷供花 月並勤觀音講 (每月十八日)	長日觀音經卅三卷讀之
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	
虚空蔵石屋 (三島社)	本尊如名 (虚空蔵菩薩)	修正月会 (正月十三日) 虚空蔵講 (每月十三日勤也)	
黒土石屋 (黒土山本松坊)	本尊馬頭觀音	仙室年中修正月会 (正月四日) 觀音講 (每月十八日) 日次勤初後入堂読誦經典	長日觀音經卅三卷 同千手陀羅尼卅三遍
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	
四王石屋 (福眞磨崖仏)	本尊四天王	仙室年中修正月会 (正月3日) 毘沙門講 (每月三日) 初後入堂読誦經典	長日毘沙門行法一座
小岩屋山 (小岩屋山無動寺)	本尊薬師如来	年中勤修正月会 (自正月六日至八日 三ヶ夜勤也) 修二月会 (自二月一日同至三日) 一夏九旬間不斷供花 七月十五日布薩 一日転読大般若会 (十月十五日請僧 廿人) 修八座問答講 →三ヶ日夜法華不斷經 (自十月廿 三日同至廿五日勤也) 天台大師供 (十一月廿四日勤也) 仏名 (十二月廿日) 月並勤薬師講 (每月八日) 往生講 (每月十五日) 百座仁王講 (每月一日) 一万卷心經会 (每月一日) 日次勤初後入堂読誦經典	長日転読大般若經一帙 薬師經十二卷 薬師行法一座
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	
大岩屋 (大岩屋山応曆寺)	本尊千手觀音 (深山)	年中修正月会 (正月五日) 一夏九旬安居勤 觀音講 (每月十八日) 日次勤初後入堂読誦經典	長日觀音經卅三卷讀之
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	

名 称	本 尊 等	勤行・堂役祭	今始御祈祷
夷石屋 (夷山靈仙寺)	本尊千手観音	年中勤修正月会 (自正月一日至三日三ヶ夜勤也) 修二月会 (自二月一日同至三日三ヶ日夜) 二季彼岸大念仏 一夏九旬不断供花 一日転読大般若 (九月九日、請僧廿人) 小立義 →修八座問答講 (請僧八人) 三ヶ日夜法花不断経 (十月十八日ヨリ同至廿日勤也) 天台大師供 (十一月廿四日) 仏名 (十二月廿五日) 月並勤観音講 (毎月十八日) 一万巻心経会 (毎月一日) 日次勤初後入堂読誦經典 最勝王講一座 観音経卅三卷	長日転読大般若経一帙 同仁王講一座
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	
西方寺 (西方山清浄光寺)	本尊延命観世音菩薩	年中修正月会 (正月五日) 二季彼岸念仏会 一夏九旬不断供花 月並勤観音講 (毎月十八日) 日次勤初後入堂読誦經典	仁王講一座 観音経三卷
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	
千燈岩屋 (補陀落千燈寺)	本尊千手観音	深山年中勤修正月会 (自正月二日至四日三ヶ日夜勤也) 修二月会 (自二月一日至同三日三ヶ日夜) 一夏九旬不断供花 七月十五日布薩 三ヶ夜法華不断経 (自十月廿五日同至廿七日勤也) 大師供 (十一月廿四日) →同修八座問答講 (請僧八人) 仏名 (十二月廿四日) 一日転読大般若一部 (請僧廿人) →一万巻心経会 (毎月一日) 月並勤薬師講 (毎月八日) 観音講 (毎月十八日) 不動講 (毎月二十八日) 日次勤観世音不断経 (供僧十人) 初後入堂読誦經典	長日転読大般若経一帙 仁王講一座 観音経卅三卷
	六所権現於御宝前	二季祭 (五節供等)	

	名 称	本 尊 等	勤行・堂役祭	今始御祈祷
	五岩屋（五辻岩屋）	本尊不動尊（秘所）	（深山仙室於此五カ秘所、昔異国降伏之時、人聞菩薩 五人同行、五壇法修行之）	
	岩殿石屋（不明）	本尊薬師如来（深山）	年中季別月並（長日勤等在之）	
	枕岩屋（不明）	人聞菩薩御枕在之		
	銚子石屋（不明）	人聞菩薩御銚子在之		
	瀧本岩屋（不明）	人聞菩薩御自筆如法經、奉納此岩屋、依之一乘菩提峯云云		
	大嶽寺社 （大嶽山神宮寺）	本尊薬師如来（高山豊後国鎮守也）	年中勤修正月会（自正月六日同至八日三ヶ日夜勤也） 一万卷心經会（毎月二日） 修二月会（自二月一日至同三日勤也） 舍利会（二月十五日） 一夏九旬不断供花 三ヶ日夜法華不断經（自十月十七日同至十九日勤） →同修八座（問）答講（請僧八人） 御靈会（十一月十三日） 法華会（十一月廿四日） 月並勤薬師講（毎月八日） 日次勤初後入堂誦誦經典 觀音經卅三卷	長日薬師經十二卷 觀音經卅三卷 仁王講一座
		六所権現於御宝前	二季祭（五節供等） 妙見祭	
末山分	両子仙（足曳山両子寺）	本尊薬師如来 本尊仙手觀音	年中勤修正月会（自正月六日同至八日三ヶ日夜勤也） 一万卷心經会（正月十三日） 一日転読一千卷觀音經 百座仁王經 舍利会（二月十五日） 修二月会（自二月一日至同三日三ヶ夜勤也） 二季彼岸大念仏 一夏九旬不断供花 十（七カ？）月十五日布薩 一日転読大般若会（請僧廿人） 三ヶ日夜法華不断經（自十月廿二日同至廿四日） →同修三十講問答講（請僧卅人） →童豎義（五問在之） 季別曼荼羅供 天台大師供（十一月二十四日） 仏名（十二月二十三日） 月並勤薬師講（毎月八日） 往生講（毎月十五日） 觀音講（毎月十八日） 日次勤觀音不断經（供僧十口） 尊勝陀羅尼 →千手陀羅尼（各廿返） 薬師供 千手供 初後入堂誦誦經典 最勝講	長日転読大般若經一部帙 同仁王講一座 同觀音經卅三卷 同護摩薬師經十二卷 金剛經三卷

名 称	本 尊 等	勤行・堂役祭	今始御祈祷
	六所権現於御宝前	二季御祭（五節供等）	
小城寺 （小城山宝命寺）	本尊六観音	年中勤（修）正月会（自正月三日同至五日三ヶ日夜勤） 一日転読一千卷観音経（正月八日） 修二月会（自二月一日至同三日三ヶ夜） 一夏九旬夏安勤 不断経（自十月十八日同至廿日） →同修八座問答講（請僧八人） 天台大師供（十月十五日） 仏名（十二月廿六日） 月並勤往生講（毎月十五日） 観音講（毎月十八日） 日次転読観音経卅三卷 初後入堂読誦經典	長日仁王経一座 長日観音経三十三卷 同金剛寿（命）経二十卷
	六所権現於御宝前	二季祭五節供等	